

＋命を守る！ 子どもの 事故予防

かけふだ・いつみ
掛札逸美



Profile

心理学博士。NPO 法人保育の安全研究・教育センター代表。健康心理学、特に子どもの傷害予防と安全の心理学を専門とする。

子どもたちの 深刻な事故から 学ぶこと

「人ごと」では、再び同じ事故が起こる

子どもの事故のニュースを見て、こんなふうに思ったことはありませんか？「なぜ、そんなところに子どもひとりで行ったの？」「親が手をつないでいたら、車にひかれなかったのに」「そんなモノ、子どもの手が届くところに置いた親が悪い」…。

人間には、事故に遭遇した人（や犯罪の被害者）に落ち度があった、と考える「ものの見方の歪み（認知バイアス）」があります。「その人が悪かったから」と思えば、「私（の子ども、家族）は大丈夫」と思うことができ、自分自身のリスクを過小評価する別の認知バイアス（楽観バイアス）を強化できるからです。それこそ、「その子の運が悪かったから」でも、「私の子どもは大丈夫」と感じられるでしょう。

でも…？ 世の中には子どもの命を危険にさらす危なさがあり、子どもが発達途上にあり、大人が「つい」「うっかり」「めんどくさい」生き物である以上、事故は必ず起こります。そして、その事故が深刻な結果に至ることもあります。予防策をとっていれば、深刻な結果はかなり防ぐことができますが、深刻な結果をゼロにすることは不可能です。

だからこそ私たちには、深刻な結果になった事故、なりそうだった事故を「人ごと」と考えず、そこから学び、深刻な結果を再び起こさないためには、具体的にどうしたらいいのかを



考える必要があるのです。「そんなこと、私の子どもには起きない」と思ってしまったら、学ぶ機会を失います。そして、その危なさは放置され、必ず、また、どこかで誰かが亡くなったり、後遺障害を負ったりするのです。深刻な事故の最も怖いところは、「いつ、どこで、誰が、その危なさで再び亡くなるか、起きる瞬間まで誰にもわからない」、しかし、「必ず起こる」という点です。それは、あなたのお子さんかもしれません。

なぜ起きたか？ みんなで考える

日本には残念ながら、人の死因や重大事故をきちんと調べるシステムがありません。たとえば、オーストラリアの場合、明らかな病死以外は大人でも子どもでもすべて死因を調査し、データ化するシステムがあります。米国でも、多くの州が子どもの死因を調べています。

死を避けることはできません。でも、死から学ぶことはできます。これまで何度も起きているのと同じ原因で、また子どもが亡くなることを、できる限り防ぐこともできます。その第一歩は、どこかで起きた深刻な事故を「人ごと」と片づけず、「かわいそうに…。うちでも起きるかもしれない…。どうしたらいいだろう」と保護者のみなさん、保育園や幼稚園、製品を作っている企業、自治体、そして社会全体が考えることです。